



ジェンダー・開発・NGO :
インドの女性NGO(第1回講演,アジアの中の日本を考
える-女性学の視点から)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 甲斐田, 万智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/9954

第 1 回

ジェンダー・開発・NGO ——インドの女性NGO

甲斐田 万智子

1 はじめに

皆様こんにちは。私は国際子ども権利センターで働いております。このパンフレットにありますように、国際子ども権利センターは3つの柱を中心に活動している団体です。今日は女性学セミナーということで、あまり関係ないと思われるかもしれませんが、例えば私達が関わっております、子ども国際協力のJFCキャンペーンというものがあります。これは、日本人男性とフィリピン人女性の間にも生まれた子どもの問題に取り組んでいまして、日本の中におけるジェンダーの問題と密接に関わっています。それから、インドの働く子ども達、児童労働の問題に関わるプロジェクトを、今年から来年に向けて、立ち上げていく予定です。その児童労働のことに関しても、ジェンダーの問題、子どもの権利侵害の問題とも、深く関わっています。例えば、女性が家の中で働いている。物価はどんどん上昇していくにも関わらず、賃金は同じままで、ゆえに実質賃金は下がっていきます。そういう中でまず犠牲になるのが、例えば学校に行かせていた娘を、やめさせて家内労働に駆り出していくというようなことです。関心のある方は会員になっていただき、事務所にも来ていただきたく思います。

非常に小さなNGOで、まだできて5年ですが、女性4人がこの国際子ども権利センターと、地球市民教育センターを運営しています。今日、＜アジアの中の日本を考える＞というテーマですが、JFCの問題、あるいは東南アジアにおいて苦しい生活をしているストリートチルドレンの問題

等は、決して私達の生活とは無関係ではないということを伝えるために、開発教育を国際子ども権利センターでは進めてきました。つまり私達の足元から繋がりを見ていこうということで、その開発教育の部門を独立させてつくったNGOが、地球市民教育センターです。今年<インドに暮らし试试看>という視点から、ジェンダーとインドのテーマで、昼間の講座を行ないました。来年度もジェンダーは一つの柱としてこのセンターで講座を開きますので、こちらの方も会員になっていただければ、嬉しく思います。こういったNGOの活動をしていく中で大変なのは、一般の方達がなかなか参加してくれない、日本の市民運動の弱さというのは、どうしても会員になって主体的に関わる人が少ない、というところです。一人でも多くのかたが支えてくださると私達も頑張っていけるので、よろしくお願ひします。

センターの活動の紹介はこれぐらいにしまして、私自身の紹介をしたいと思ひます。大学時代、南の問題、特にフィリピンとの出会いを通して、日本とフィリピンがこんなにも関わっている、具体的にいえば、ナボタスという港に住む人達が、日本の造った道路や住宅地によって立ち退きにあっていました。それに対抗している女性達のパワーに惹かれて、こういう世界に入ったという経過があります。船橋さんとの出会いのきっかけは、「アジアの女たちの会」というのがありまして、そこに出入りしていた関係から存知あげていました。4年間日本ユニセフ協会で、今申し上げました開発教育を行いました。つまり単にアジアの子ども達がかわいそうだからということで募金をして、それでお終ひ、というのではなくて、私達がそれにどれだけ関わっているのか、私達の生活とそのかわいそうな子ども達の貧困の原因を、考えることなしに募金をするのであれば、かえって偏見や優越感だけが強まってしまうという意識から、一生懸命開発教育をしていましたが、なかなかそのような南の問題、アジアの問題を子ども達に分かり易く教える教材がないということで、わたくしも微力ながら、『たみちゃんと南の人々』（明石書店）、『誰のための援助』（岩波ブックレット）というような本を作りましたが、もっと教材を作る必要があるということで、当時開発教育の先進国であるイギリスに行ってきました。その歓送会

の際に、船橋さんに「イギリスに行くのだったら、しっかりフェミニスト運動を見てらっしゃい」と言われましたことを、非常に強く覚えています。その頃、ジェンダーのことに関心はあるつもりでも、理解はしてなかったように思います。ユニセフでは途上国での母親の役割を重視しています。つまり母親が読み書きができ、衛生保健の知識を得れば子どもは生存するのだ、ということで、女性のプログラムがありました。しかし、イギリスに行きまして、ジェンダーというクラスを取ってからは、そういう母性だけを強調して女性を見ることに対して、それから女性と開発というプログラムの受け手としての女性、という見方ではだめなのだとすることを、学びました。やはりそうではなく、女性が主役となって、女性が社会の変革の担い手であるという見方をしていかななくてはならないことも、学んだように思います。

その後、夫が国連のユニセフで働くことになり、最初の赴任地がブータン。次がインドになり、インドには4年間、去年の夏までおりました。私自身の専門は子どもで、子どもの権利の視点から、——子どもが主役となって社会を変えていく——という運動に一番興味があるのですが、たまたまイギリスで勉強していた時にも文献で読んでいた、SEWAという後からお話しする女性のNGOで、国際的にも非常に有名なNGOが非常に近い所がありました。そしてSEWAについて研究したいと思っていた時に、この本の編者である斎藤千宏さんから、南アジアNGO研究会に加わってくれと言われ、そのメンバーとして、SEWAのことを少しずつ研究していくようになりました。そのころ子どもがまだ2歳と0歳で、思うほどには研究できなかったのですが、その事を、後から少しお話ししたいと思います。

その研究期間が2年間ありまして、1年目がSEWAのことで、2年目が先ほど少しお話しができましたけれども、北京の会議に向けて、インドの女性運動家あるいはNGOが、どのように自分達の声を集めていったか、ということをし少し調べました。今日は先に、そのインドの女性運動の全体を話し、2つめのパートでSEWAの話をしたいと思います。

では、これまでインドに行かれた方はいらっしゃいますか？

ちょっと普段の私達の生活とかけ離れた生活をしている女性達ですので、少しビジュアルにイメージしていただくためにも、去年の1月、まだインドにいた時に作った「女たちが語るインド」というビデオを見ていただきます。その中に、世界の経済の動き、グローバリゼーションの波を、インドの女性も間接的ながら受けている、という説明も少しあります。ビデオは15分間で、3部構成です。第1部が<働く女たち>、第2部が<息子が欲しい>、第3部が<スラムに学校ができた>、となっておりますが、今日は、第1部<働く女たち>をご覧ください。

2 インドの女性の問題と女性運動

貧しい女性達がどのような暮らしをしているかを、少しだけ見ていただきました。私が、インドに住み始めたのは1992年なのですが、ちょうど一年前の91年にインド政府は、経済の自由化を始めました。そして外国の資本がどんどん入ってきました。例えば、ある程度お金持ちの人間にとって違って来たことは、日本のオーディオ製品が手に入るようになったこと、また国産品のソフトドリンクしかなかったのに、ペプシやコーラが入るようになったという風な、目に見える変化です。そして、それが徐々に子どもや女性、社会の弱い部分に影響を及ぼしていきます。そういった経済の問題に焦点を絞って、草の根の女性達、あるいは女性運動家がどのように声をあげていったかを、紹介したいと思います。

まず、簡単にインドの女性が置かれている状況を、男女人口比という観点から少しだけ説明します。つまりジェンダーの問題、女性差別の問題が、具体的にインドでどのような形で表れているかを最も如実に表している数字が、男性1,000人に対して、女性が何人いるかを示す人口比です。通常の世界、例えば日本、またはヨーロッパ等は、だいたい男性1,000人に対して女性1,040人。インドの場合は、年々少なくなり、今世紀始めは972人だったのが、1991年には927人まで減っています。つまり、本来ならこの世に存在したであろう女性、4,900万人が消えているということです。特に貧困にあえぐ家庭においては、女性の地位は非常に低いです。具体的にはどういうことが行われるかという点、ビデオにもありましたように、

牛乳が高くて買えないとか、一ヶ月に一回ヤギ肉を食べていたのに、食べられなくなった。また家庭では息子に栄養あるものを食べさせても、娘には与えません。後から申しあげます構造調整プログラムという政策によって、社会予算がカットされています。具体的には、ただでさえ入手困難だった薬や保健サービスが、貧しい人々の手にますます届きにくくなっていきます。その結果、民間の高い医薬品とか、病院に行かなくてはいけなくなってしまいます。そうすると、息子だったら、薬を与えたり、病院に連れていったりしていた母親は、娘となると薬も与えない、病院にも連れていかないようになります。そういう傾向は前からあったのですが、ますますそれは強まり、女の子だと手後れで死んでしまうことが多いのです。昔日本でもあった間引きですが、インドの場合生まれたばかりの女の赤ちゃんに対して行なわれます。それから、女の胎児に対する中絶は、ダウリーの問題とも関係し、経済の自由化と消費文明の浸透にともなって、ますます増えています。日本との関わりで言えば、性別鑑定の超音波装置がどんどんインドに輸出されています。その機械があれば簡単に胎児の性別が判定でき、間違えることも多いのですが、村の女性達もその機械のある病院に行って、胎児が女性であると判れば、簡単に中絶するケースが増えているようです。それにより、男女人口比は、ますますいびつな割合になり、男性の人口数に比べて女性はどんどん少なくなっています。

もう一つ、妊産婦死亡率がインドでは高いです。それは、インドでは出産の時にケアされません。また装置が無くて死んでしまう人や、貧血のために女性が死んでしまうこともあります。妊産婦死亡率と中絶の関係が高いです。つまり農村では、非常に危ない方法で中絶を行なうということがあります。また経済の自由化という点では、まだまだ安全性が確かめられていない避妊方法が、インドの女性に対して使われる。極端な話、実験台に使われます。また多産ということで、リスクが高くなり、妊産婦死亡率が高くなります。そういうことから、インドの女性が死亡する確率が高くなるということがあります。そういう社会的状況の中で、インドの女性運動が、これまでどういうことを言ってきたかを、簡単に見ていきたいと思えます。

インドの女性運動は、古くは独立運動と共に始まりました。例えば約百年前につくられた全インド民主主義女性協会という団体は、全インドに支部があり、会員が350万人もいます。1970年代までの女性運動の担い手は、だいたい都市の中産階級の、高学歴の女性たちで、例えば、ダウリー（結婚持参金）に反対する運動や、レイプに反対する運動を行なってきました。そして、法律の改正を訴え、ある程度達成されました。インドにおいて、女性の人権を守る法律はある程度整備されています。問題は実行されていないことです。また一部には木を守るような女性の草の根の運動もあったのですが、都市の告発型の運動が中心で、都市と農村の間にはかなり大きい溝があり、貧しい女性と都市の女性運動家が交わる機会がなかなかありませんでした。

それが、1974年にインド女性地位委員会ができ、女性の学者が初めて大規模にインドのスラムや農村地域を回って、貧しい女性の実体を調査しました。そこで初めて女性学者は、貧しい女性の置かれた状況に気づきました。経済を問うにあたって、女性の経済学者達が、貧しい女性の視点を持たなくてはいけないという認識を持ち、学者が女性運動に参加するようになりました。それが草の根の女性の声が聞かれるようになった、最初のきっかけです。

80年代になりまして、その頃から政府による女性対象のプログラムも盛んに行なわれるようになりました。女性の人材が、例えば社会学のバックグラウンドを持つ女性、女性学のバックグラウンドを持った女性等が、有給のスタッフとして、政府のプログラムに参加するようになりました。それに対して、それまで女性運動家として無給で働いていた女性からは、政府の体制に取り込まれてしまうのではないか、という批判もありましたが、これは大きな変化をもたらしました。つまり専門的な技術とか、知識を持った女性達が、政府のプログラムを進めていき、しかも女性の視点を持っていますので、保健やトレーニングをするのにも地元の女性リーダーとドッキングしていきました。そういうプログラムを通して、女性の視点、女性運動の視点をもたらします。そこで保健の知識を身につけた女性が地域のリーダーになって、女性運動をリードするような変化が、草の根レベルで

おこるようになります。それとともに、それまでの女性運動が、戦う相手として、レイプをする男、あるいは暴力をふるう夫だったり、持参金を要求する花婿であったりしたわけですが、そういう戦う相手がだんだんと広がってきました。つまり国家であったり、西側諸国、多国籍企業、というマクロレベルへと変化していきました。

80年代にそういう変化が起きて、女性運動は90年代に入ると政府にとって無視できない存在になりました。マクロを相手にすることによって、また経済問題によって被害を受けた女性が団結することによって、大きなうねりを生み出しています。

そのような中で、北京女性会議へ向けてのプロセスが始まります。このプロセスで、私が特に言いたいのは、高学歴の女性が、いかに草の根レベルの女性達の声を拾い上げていったかです。そして、その草の根の女性達がNGOのスタッフと団結して、何を訴えているかということ。その声に、私達も耳を傾ける必要があるのではないのでしょうか。

まず、ご存知のように、1995年8月に北京会議が行われましたが、その一年半前の93年12月に、北京会議連絡会ができました。英語で言うとCo-ordination Unit (以下CUと略記)と呼ばれています。インド各地の草の根の女性達の声を、調整して一つにまとめて持って行く部門のだという意味だと思います。このCUの活動資金は、デリーにある先進国の政府援助機関で、例えば、ノルウエー、スイス等、多くのWIDに関わっている政府援助機関がデリーにはあります。そして大きなNGOも資金を援助しています。残念ながら、日本は、そこに含まれていませんでした。日本は、人口問題などにお金を出しているのですが、そういう時にもソフトの面には、ほとんどお金を出していません。欧米などは、CUのスタッフの交通費などにお金を出しているのですが、こういった後に残らないようなお金を、日本政府は出しません。目に見えないソフトな人たちとして、女性をエンパワーするのに必要な支援を、日本政府が行なっていくためにも、私達市民が、援助や、税金がどのように使われているかを、気をつけて見ていくことが、重要だと思います。そのCUの目的は、草の根の女性達の声を、国際レベルで反映させること。標語は、——国内にたくさんの北京を

作ろうよ——です。つまり、北京だけが目標ではない、そのプロセスが大事なのだということです。

活動を進めるに従い、いろいろな問題が出てきたのですが、大事な問題をきちんとまとめていこうということで、NGO諮問委員会も各地のNGOの代表者が集まってつくり、CUとNGOの諮問委員会が、各地の女性達の声を繋ぎあわせていきました。「今回の女性会議ほど、草の根の女性の参加が多かったことはない」という声を、一貫して私は聞きました。インドでも一番被害を受けているのは、草の根の女性なのだから、彼女たち自身を北京に送ろうということから、CUが送った参加者の75%が草の根の女性達でした。また、これまで声が届かなかった女性達が、北京会議へのプロセスの中で、互いに繋がれるようになりました。たとえば東北女性ネットワーク、これはマイノリティー、モンゴル系の人達が、東北インドに住んでいて独立運動を進めている関係上、表舞台にはなかなか出られない女性達がネットワークを持ったり、ムスリムの女性達がネットワークを持ったり、ダリットと呼ばれる人達（最も虐げられている人達）が、共通の問題を持っているということで、全国の連盟を作ったりしています。

この北京に向けて各地のNGOの存在がわかりました。それはジェンダーNGOダイレクトリーという形になっていて、500以上のジェンダーに関するNGOが、そのダイレクトリーに収められています。

2番目にCUが果たした役割は、草の根の女性達が共通の問題を認識したということです。CUによって、課題別に、ミーティングが100以上開かれたのですが、例えば、開発という名の下で強制退去にあっている、というような問題が各地で共通していることが確認されました。また、保健の問題。前は、自分の身近にある薬草や伝統医療をによって、自分の体を治していたのに、それができなくなった女性達が、各地でミーティングを開き、そのミーティングで出てきた共通項を、全国レベルのワークショップ（コンサルテーション）で文書にまとめるということを行ってきました。その中で見えてきたことは、場所が違っても、仕事が違っても、草の根の貧しい女性達が抱えている問題は、こんなにも共通点があるということでした。特に構造調整プログラムの、マクロ経済の影響が、多くの女

性達によって、共通の問題として認識されました。インドのNGOの日々の活動は、保健や、トレーニングなど、直面している課題に追われていて、全体をとりまく状況や構造的原因に取り組むことができなかつたのですが、CUによって以前は、やりたくてもできなかつた、政府に対しての政策提言活動（アドボカシー）が、できるようになりました。

それから、北京での会議でお終い、というのではなく、その後の組織固めにも、CUは大きな役割を果たしました。

3 北京会議に向けて

それではここで具体的に、北京に向けて、インドの女性はどうのような声を上げたのか。四つの声から見ていきたいと思います。ご存知のように、北京では、国連が行動綱領を採択しました。その行動綱領が、インドではCUによって、事前に配布されました。インドでは何十という言語があるのですが、それぞれに訳され、草の根の女性達に配布され、批判を加えてもらうということをしています。その国連の行動綱領に対する批判の文書で、代表的なものを二つ。政府レポートに対する批判を二つ紹介します。

まず、国連行動綱領に対する批判で、CUが各地でワークショップを開いて、最終的にまとめたのが「インドの女性の声」というものになりました。そこで言っていることは、国連の行動綱領の中には女性が貧しいという記述が多くでてくるけれども、その貧困の重荷を負わせている責任がどこにあるのか、行動綱領では言っていない、ということが一つの大きな批判点です。つまり、国連の行動綱領の草案は、家父長主義と資本主義の価値観を再生産しているに過ぎないのではないか。そして、女性がいかに経済的に貢献しているか、また女性が、暴力に対して、いかにすぐれた能力があるかについて、何も触れていない。これについても批判しています。

もう一つは、自然資源を管理している女性の役割に対する認識の不十分さを、批判しています。問題なのは、市場中心主義の、開発の枠組みであり、それによって資源が不平等に分配されていると主張しています。例えば、インドでも経済の自由化に伴い、民営化と輸出志向の工業化がどんどん進んでいます。そのため、貧しい女性達が食料作物のための土地を奪わ

れたり、森林が観光リゾート地として変わっていきつたりしています。日本との関わりで言えば、海老の養殖をインドでしています。これによって、インドの飲料水を取り上げる形となり、貧しい女性はますます飲料水を得にくくなっていきました。村によっては、飲料水に塩分が入ってしまい、村を捨てなくてはならなくなってしまう所もあります。このような市場中心主義の開発の結果、環境が破壊され、強制退去が行なわれ、貧しい女性の生活の糧が奪われてきました。結局今の開発によって、資源が南から北に移転していて、その結果貧しい人々、特に女性への打撃が大きくなっているのではないかと、ということ「インドの女性の声」では主張しています。

2番目は、全インド民主主義女性協会、350万人の会員を持つNGOなのですが、そこが国連の行動綱領に対して批判しています。まず第一の批判は、構造調整プログラム（SAP=Structural Adjustment Program）に対する見方なのですが、SAPは債務危機に陥った国のためのやむをえない措置だと言っているが、それらの国々を債務危機に陥れたまさに同じ機関である世界銀行やIMFが、その債務危機から救い出そうとしているのは矛盾していると批判しています。つまり女性が個人主義、競争、攻撃的な利己心に基づいた経済に統合され、生産的人間にならなくてはならない、というようなことを政府レポートは暗に示しているのではないかと批判しています。

しかし、ビモチャナ（後述）は、こういう多様性を無くしてしまう経済学、近代的開発は、各地で栄えている文明や、文化、社会を壊してしまうものだ、と主張しています。私達が望むのは、多様性を無くす開発ではない。新しい暴力や疎外や抑圧を生むような開発を私達は望んではいない。このような声をあげています。

こういう声を北京にむけて、いろんな女性グループや、NGOが出していったのですが、なかなか日本に住んでいるとそういう声が聞こえにくくなってくると思います。実際北京に行かれた方はそういう声を聞いたかもしれませんが、インドの女性たちは＜SAPがインド女性に及ぼす影響＞というワークショップを開いたり、食糧を得にくくなっている貧しい女性

の視点から、「まず食糧を」というパンフレットを配ったり、あるいは、<今日の開発モデルは生存することを難しくしている>といったような、ワークショップを開いています。健康面においても、SAPの影響を訴え、北京で大きな役割を果たしたと言われてしています。

また、「インドフェミニスト見解」というものも出しています。そこでは、政府レポートに対しては、主要な七つの女性団体が「北京に向けて—インド女性運動の視点から」という批判の文書を出しています。ここでも、構造調整プログラム（SAP）は、「自国の経済危機の負担を第三世界の貧困層に押し付けようとする手段」として厳しく批判されています。そして、SAPのマイナスの影響は、経済面のみならず、社会や政治面にも及んでいると主張しています。つまり、「どんな犠牲を払ってでも早く金持ちになるんだ」という価値観が増幅されるために、人間関係が希薄になり、暴力が増し、その被害を受けるのが女性だといっています。また、意思決定過程がさらに中央集権化されるために、発言権の少ない女性がますます疎外されるともいっています。

最後にビモチャナ（Vimochana）という女性のNGOの批判について紹介します（Indian Association of Women's Studies、ニュースレター1995年春夏号掲載）。それによると、政府レポートの核となっている開発論には、人々の痛みや女性のビジョンとの共通項がほとんどない。経済のグローバリゼーション、自由化、市場開放が、進歩と社会変革の基本テーマとなっており、女性は「エコノミック・ウーマン」に新しく生まれかわらなければならない、先進国の危機を南に押しつけるな、というようなことを言っています。結論としては、北京で、政府同士の連帯よりは、草の根の女性、女性同士の連帯の方が上手くいったということ、を、「インドフェミニスト見解」では言っています。北京後、CUの促したこうしたプロセスを繋げていくために、全国女性連盟が結成されました。経済問題だけでなく、政治問題もインドでは大きなテーマとなっています。憲法が改正されて地方議会で、議員の33%を女性にすることが決まりましたので、女性を意思決定過程に参加させよう、参加しようという動きがありまして、北京後の一年間は政治に焦点あてた運動を行っています。例えば、<女性のア

ジェンダ（課題）を選挙政治の主流へという集会をもったり、そこで全インド女性宣言を打ち出しています。各政党に対しては、ジェンダーの問題とどのように取り組んでいくのかという質問状を出して、アドボカシーを行ったりしています。以上、駆け足でインドの女性の声について話しました。

4 SEWAについて

では、貧しい女性達が具体的にどのような活動を通し自分達の生活、社会を変えようとしているか。SEWAというNGOの例を紹介したいと思います。SEWAというのは、Self Employed Women Associationの略です。SEWAは、貧しい女性のためにつくられました。夫だけの収入ではやっていけず、ほとんどの女性は働いています。どういう所で働いているかと言いますと、インフォーマルセクターで働いています。日本語では、非組織部門等と訳されますが、雇用、被雇用の契約が結ばれない所で働き、法律で保護されない労働に携わっている人のことです。具体的に、フォーマルセクターで働くというのは、工場や会社で働くことを言い、この人口はインド労働人口の、7%くらいです。レジユメにありますように、93%を占める人々は、インフォーマルセクターで働く人々です。つまり、インフォーマルセクターの人々を視座に入れないで、インドの労働運動は語れないとSEWAはいつも言っています。

具体的にどのような仕事かと言いますと、第一に家内労働者で、家で線香を作ったり、おせんべいを作ったりしています。彼女達は、見えない所で働いているので、散々搾取されてきています。雇い主に、材料も販路も独占され、完全に依存しているので、どんなに安い賃金でも我慢しなくては行けないという関係で仕事をしてきたのです。次に露天商とか、行商です。道端に座ったり、リヤカーで歩き回って物を売ります。農村で食べていけなくなった場合まず収入を得ようとして始めることがこれです。資本金が少なくても、技術が無くてもすむからです。第三が、肉体労働者、サービス業です。日雇いの建設作業、紙屑拾い、家政婦です。家政婦についてですが、先程言いましたように、物価は上がるのに、賃金は上がりませ

ん。家政婦は一つの仕事いくらで働いています。例えば皿洗い一ヶ月50ルピー、洗濯一ヶ月50ルピー（1ルピー＝3.5円）という形で働いています。このように低賃金なので、一月いくつもの家庭を掛け持ちしないと生活できません。それに対して雇う方の中流家庭においては、固定観念がありまして、どんなに物価が上がっても、賃金を上げるということはしません。普通に付き合っている分には、常識的な人達でも、家政婦の賃金となると、考えられないような低いものにしていました。

SEWAが何故始まったかと言うと、イラバットさんと言う女性が、ガンジー主義で学生時代から運動を行なっていて、貧しい人のために働くのだと、ガンジーが作った繊維労働組合の婦人部に勤めていました。そんななかで、繊維工場で働く女性達は法によって、守られているが、一歩外に出て、布を工場から工場へ運ぶ女性達は、低い賃金で、搾取されているという状況を見て、インフォーマルセクターの女性達のための組織をつくろうと始めたのがこのNGOで、労働組合として始まりました。最初は最低賃金を獲得しようと、デモを行ったり、雇用主に陳情したり、今までは家内労働者として家庭の中に閉じ込められていた女性が、団結して声をあげることによって、運動を起こしてきました。それにより、賃金が少しずつ上がっていきましたが、法律で決められている最低賃金には届きませんでした。それは、インフォーマルセクターで働いている女性だからです。そこでSEWAはILOで家内労働者を保護する条約を作る運動を始めます。これは1996年に条約として成立しました。前年に、日本は棄権か、反対の票を投じていて、私にも日本政府に働きかけをして欲しいと言われました。その際、イラバットさんは私に、「これはインドだけの問題でなく、日本女性の問題でもあるのよ」とおっしゃっていました。また、露天商についても、役人や警官から暴力を受けたり、賄賂を要求されたりしてきたのですが、彼女達も労働者だということで、裁判に訴え、最高裁の判決で、SEWAの免許を持っている人達はそこで仕事をしてよい、という判決を勝ち取りました。

それから、SEWAを一躍有名にしたものに、SEWA銀行というものがあります。多くの貧しい女性は、銀行に貯金ができませんでした。貯金

が無い女性は、ほとんど高利貸しの借金地獄に陥ってしまっていて、そこから抜け出せないために、貧困の度合いがますます激しくなっています。そこから抜け出すきっかけを、SEWAは作りました。女性も場所やサービスさえあれば、貯金をすること、そして借金を返済する能力があることを証明しました。SEWA銀行の融資を受けることによって、まず借金を返済して、雇い主への依存関係を絶ちきります。次に高いレンタル料を払って、借りていた道具を買うことにより収入を上げ、またより生産性の高い道具を買うことにより経済力をつけていきました。そして最後には住居や、土地を広くし生産性を上げました。このような銀行活動を通して、SEWAの本当の活動が始まったと、イラバットさんは言います。何故かと言うと、女性が返済できない時、何故返済できないかをSEWAのフィールドワーカーは、一軒ずつ聞いてまわります。理由を聞いてみると、出産であったり、夫が病気だったり、多くの場合、女性の責任では負えない原因でした。つまりフォーマルセクターで働いていれば、手当てが出たり、保険金がおいたりして乗り切れたところが、インフォーマルセクターの女性には、そういうサービスがないために、返済が不可能だったということが、分かったのです。また、仕事を通してケガをして、動けなくなった女性に対して、労災が無いので、そういう女性に支援事業を行なう事も、銀行の部門で始めています。こうしてSEWAは保健、保育、社会保険、住居、ハラスメントにあった時の法的援助等の活動も始めました。

一つ覚えておいていただきたいのは、SEWAは福祉的考えからではなく、それらを整備し、サービスを提供するのは、働く彼女達の権利であるという考えから活動しています。例えば保育は福祉のためではなく、保育を整備することは、働く彼女達の権利であるという考えから行なっています。労働組合運動として始まったSEWAですが、今では労働組合運動と協同組合運動の共同行動をSEWAの強みとしています。例えば労働組合運動で賃上げ闘争をします。そうすると、雇用者は、もう明日から来ないでいいと言い、会員は職を失うことになります。そういった経験からSEWAが得た大きな教訓は、仕事の無い所では、貧しい女性は交渉力を持ってないということです。特に農村では、日雇いの農業労働者が一番貧しいので

すが、農村における女性のほとんどが、こういう日雇いです。年間100日しか仕事をもらえない場合、いくら賃上げを要求しても、すぐにクビになって、他の女性を雇うことになります。そういう所では、仕事の機会を増やすことが必要不可欠なのだということで、女性の雇用機会を増やす事業に力点を置きます。特に農村では、例えばミラー刺繍というものが盛んで、伝統的に女性が刺繍の技術を持っているのですが、仲買人や商人によって、安く買いたたかれています。そういうものを組合として団結させ、材料も仕入れ、販路も自分達で開拓することにより、収入を大きく増やしていきました。また、そうすることにより雇用者との仕事の交渉が可能になります。同様に、乳牛組合を作って女性の収入を上げたり、荒れ地を開拓して果樹園を女性自身が運営することにより、収入を上げていきました。また、植林をすることにより、地域の環境改善の担い手となることも、SEWAは進めています。以上のように、SEWAは、諸々の協同組合を作っていたのですが、それにより、女性のセルフイメージも高まり、発言力をつけていきます。

もちろん、読み書きができない女性が、社会を変える担い手となることは難しく、SEWAは、SEWAアカデミーをつくり、リーダーシップ養成に力を入れています。例えば、インドにおいて、女性は社会化の過程で、男性よりも劣っているものと、教え込まれます。しかし、女性も男性と同じ能力を持っていることを、歌をうたいながら、学んでいきます。また、一人一人の労働時間を聞いて、男性よりもこんなに長く働いているのに、収入が少なく、また資産も少ないのは何故かというような事も、円グラフを使って考えたりするトレーニングをします。

SEWAの理念は、基本的に女性が経済力を持つことによって、解決できる、ということを信念としています。貧しい人の自立は、一人ではなかなかできないので、集団的自立を目指していますが、職業を基盤とした組織化が基本と言っています。女性こそ、リーダーになれる、そして女性のリーダーにより地域の改善に働きかけられる。そして、女性のアドボカシーの力を信じ、政府と対等な立場で、要求していけるのだということ、多くの草の根の女性の例を取り上げて、訴えています。